

「神に栄光を帰せよ」②

黙示録 14:7. 神に栄光を帰すこと—神に栄光を帰すということは、我々自身のうちに彼のご品性を表すことであり、このようにして、彼を人々に知らせることである。そして、どんな方法であっても、御父やみ子を知らせることによって、神に栄光を帰すのである (MS 16, 1890年)。

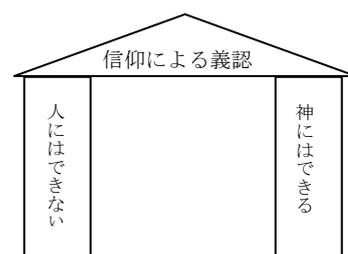
実物 292 義とは正しい行ないである。そしてすべての者は各自の行為によってさばかれる。わたしたちの品性は、わたしたちの行ないに現われる。行ないは信仰が本物であるかどうかを示す。

我々の内には神の嘉せられる義はない。神の義、品性を表すことができない。人間の正しい行いは自我で汚れている。

イザヤ 64:6 われわれはみな汚れた人のようになり、われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである。

神に栄光を帰すためには二大真理を知らなければならない：

1. 人間の塵であること、無能力、無価値さを知ること。
2. 人にはできないが神にはできないことはないこと。



「第三天使の使命(第一、第二を含む)は、信仰による義認そのものである」 1 SM327

E.G.ホワイト：「信仰による義認とは何か？それは人間の栄光をちりにして、人間ができないことを神が人間のためになされる神の働きである。人間が自分の無価値さ(nothingness)を認識するとき、キリストの義を着せられる備えができるのである」 TM 456

E.G.ホワイト：「神と人類の敵は、この真理(信仰による義認)が明らかに示されることを望んでいない。なぜなら、人がこれを完全に受け入れるならば、自分の力が砕かれることをサタンは知っているからである」 GW161.

人間の無力さ、無価値さ(nothingness)

人間は土のチリで造られた。

詩篇 103:14 主はわれらの造られたさまを知り、われらのちりであることを覚えていられるからである。103:15 人は、そのよわいは草のごとく、その栄え(栄光)は野の花にひとしい。103:16 風がその上を過ぎると、うせて跡なく、その場所にきいても、もはやそれを知らない。

造られた被造物が創造主の前に高慢にふるまうとどうなる？

- ・ロボットが創作者になりあがろうとするようなもの。
- ・ルシファーの墮落
- ・人類の墮落

ローマ 3：23 すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、

「神に栄光を帰す」ときに、栄光を与えられる。神に栄光を帰すことは、人間の栄光をチりに伏すこと。

創造によって人間に栄光が与えられた。人間にはなかった。尊厳を神が与えた。

イザヤ 3:7 すべてわが名をもってとなえられる者をこさせよ。わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた。

コロサイ 1:16 万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も權威も、みな御子にあって造られたからである。これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。

しかし、罪を犯したとたん栄光は去った。自己中心、自己称揚、高慢 pride, sin. 「私」、自己称揚、サタンの精神が人間の性質となった。

罪のため、神の栄光を受けられなくなった人間が再び栄光を受けるには、人は塵で造られた真理をまず第一に知らなければならない。そうする時に神に栄光が帰される。神に栄光を帰すと神は栄光を与えら

れる。栄光は神にのみ属するものだから。

115:1 主よ、栄光をわれらにではなく、われらにではなく、あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、ただ、み名にのみ帰してください。

人は生まれながらの罪人である。

- ・生まれつき罪人、自己称揚、自己中心、

詩篇 51: 見よ、わたしは不義のなかに生まれました。わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました。

エペソ 2:1-3 さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って、歩いていたのである。また、わたしたちもみな、かつては彼らの中において、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった。

ローマ 3:10-12 次のように書いてある、「義人はいない、ひとりもない。悟りのある人はいない、神を求める人はいない。すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている。善を行う者はいない、ひとりもない。

イザヤ 53:6 われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かつて行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。

- ・人の無能力：

ローマ 3:20 なぜなら、律法を行うことによっては、すべての人間は神の前に義とせられないからである。……

ローマ 7:15-24 わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる。そこで、この事をしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。

……すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいますが、わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。

わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。

- ・人はどうして罪を犯す？罪を犯すから罪人となるか？いや罪人だから罪を犯すのだ。

例：さそりとかえる

自分の弱さが力と栄光を受ける秘訣

ローマ 7:25 わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。

ルカ 1:37 マリヤにみ使いが「神には、なんでもできないことはありません」

マルコ 10:27 「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」

- ・パウロの誇り—自分の弱さと十字架！

2 コリ 11:30 もし誇らねばならないのなら、わたしは自分の弱さを誇ろう。

2 コリント 12:9 ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

2 コリント 12:—10 だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」

ガラテヤ 6:14 しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇

とするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。

なぜなら、3:4 もとより、肉の頼みなら、わたしにも無くはない。もし、だれかほかの人が肉を頼みとしていると言うなら、わたしはそれをもっと頼みとしている。

3:5 わたしは八日目に割礼を受けた者、イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、3:6 熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である。3:7 しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。3:8 わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。

ピリピ:13 わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる

・ E.G. ホワイト

国と指導者上 143 自分の無価値なことを知って全く神により頼む魂ほど、一見無力に見えるが、真にこれほどに打ち勝つことができないものはほかにない。

E.J.ワゴナー:「我々は全く無価値な者であるが、キリストは我々を価値ある者とするために死なれたのである」ローマ書の研究、1891。

GW161. 神と人類の敵は、この真理(信仰による義認)が明らかに示されることを望んでいない。なぜなら、人がこれを完全に受け入れるならば、自分の力が砕かれることをサタンは知っているからである。

青年 222 完全な者となるように最善の努力をつくしなさい。自分はまちがうから神の奉仕から除外されていると思っはなりません。神は私たちの身体(構造、仕組み)を知っておられ、私たちがなりに過ぎないことを覚えておられます。神からあたえられた才能を忠実に用いるときに、あなたは知識があたえられ、自分に満足ができなくなります」

・ アブラハムの経験 — 第一天使の使命

ローマ 4:17 死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。4:18 彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。.....4:19 すなわち、およそ百歳となって、彼自身のからだは死んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であることを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかつた。4:20 彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、4:21 神はその約束されたことを、また成就することができるかと確信した。4:22 だから、彼は義と認められたのである。

・ イエスは、父に栄光を帰した故に、神はイエスに栄光を賜った。ヨハネ 5:39、15:5、17:1,4,5

ピリピ 2:6-11 キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

・ 天国の住民は栄光を自分のものと主張する者はない。創造者と小羊を賛美と栄光と誉を帰す。黙示録 15 章

自分の弱さ、無価値さを知る人は、イエスに、十字架にすがる！ だから強い！

讚美歌 495 「われは誇らんただ十字架を」

“In the Cross, In the Cross, Be my glory ever” 「十字架、十字架に わが栄光永久にあれ」

ファニー・クロスビーは 1820 年 3 月 24 日、アメリカのニューヨーク州サウスイーストのごく普通の家

に生まれました。父は、彼女が生まれて間もなく亡くなり、母親と信仰深い祖母とに育てられました。眼が見えないということと、この二人の素晴らしい家庭教育がなかったなら、私たちは礼拝の中で旧495番「イエスよこの身を行かせたまえ」、旧517番「われにこよと主はいま」、旧524番「イエスキミイエスキミみすくいに」を歌うことができなかつたでしょう。彼女が詩を作った讚美歌には、他に旧489番「きよきしべにやがてつきて」、旧493番「つみのふちにおちいりて」、旧498番「あみたまよくだりまして」、旧518番「いのちのきずなの」、旧529番「ああうれしわが身も」があります。さらに旧210番「きよきところをつくれよと」、旧492番「かみのめぐみはいとたかし」は彼女が曲を作っています。は、9000以上の賛美歌を作詞したと言われた。

彼女は、たちまち、広く認められるようになり、ホワイト・ハウスで、ジェイムズ・P・ポーク大統領に会い、アメリカ議会において、彼女の救い主を証した。彼女は、アメリカ全土に旅行し、文化講習会の講師をしたり、D・L・ムーディーや、他の伝道者たちの集会のために奉仕したように、他のキリスト教修養会においても奉仕をし、95歳の天寿を全うした。

実物 339-340

わたしたちの天の父は、わたしたちが与えられただけの才能を発揮することをお求めになる。わたしたちには負うことができない重荷を無理に負わせられることはない。「主はわれらの造られたさまを知り、われらのちりであることを覚えていられるからである」(詩篇一〇三ノ一四)。神がわたしたちにお求めになることは、すべて、恵みによって、わたしたちのなし得ることなのである。「多く与えられた者からは多く求められ」(ルカー二ノ四八)。わたしたちのできることから少しでも足りなければ、それに対する責任を負わなければならない。主は、わたしたちにどんな奉仕ができるかを正確にお計りになる。活用した能力と同様に、活用しなかつた能力も調べられる。わたしたちの才能を正しく用いたならば、到達し得たはずのことに対して、神はその責任を問われる。わたしたちは当然なし得たにもかかわらず、才能を神の栄えのために用いなかつたために、なし得なかつたことを、さばかれる。自分の魂を失わないまでも、用いなかつた才能の結果がどんなものであるかを永遠にわたって知らされることであろう。なぜなら、得べきであつて得なかつたところのすべての知識と才能とは、永遠の損失となるからである。しかし、わたしたちが自分を全く神にささげて、神の指導に従うならば、その達成については、神が責任を負ってくださる。わたしたちが、忠実に働くならば、これが成功するかどうかを気にすることを神は望まれない。

失敗のことは一度でも考えるてはならない。わたしたちは、失敗することのないお方と協力しなければならない。自分の弱さや無能のことを口にしてはならない。これは、神に対する不信を示し、みことばを拒むことを示している。重荷についてつぶやいたり、負わせられた責任を拒んだりするならば、それは、主が苛酷であつて、能力を与えないで要求するといっているのと同じことである。

なまけたしもべの精神を、わたしたちはけんそんということがあがあるが、真のけんそんはこれとは全く異なつたものである。けんそんであるということは、何も知力に欠け、抱負もなく、おく病な気持ちで人生を送り、失敗することを恐れて責任を避けることではない。真のけんそんは、神の力に頼つて神の目的を成就することである。

神はみこころにかなう人びとを用いてお働きになる。神は大きな働きをするのに、最もいやしい器をお選びになる。それは、神の力が人間の弱さによってあらわされるためである。わたしたちは、標準をもつていて、それによって、一つの事を偉大であるといい、他のものを小さいと言うのである。しかし、神は、人間の定規でおはかりにならない。人間が大きいと思うことを、神も大きく思い、人間が小さいと思うことを、神も小さく思われるものと決めてはならない。才能を評価したり、仕事を選んだりすることは、わたしたちのすることではない。

わたしたちは、神が負わせてくださった荷を神のために負い、常に神のみ前に出て、安んじているべきである。

青年 222

完全な者となるように最善の努力をつくしなさい。自分はまちがうから神の奉仕から除外されていると思つてはなりません。神は私たちの身体(構造、仕組み)を知つておられ、私たちがちりに過ぎないことを覚えておられます。神からあたえられた才能を忠実に用いるときに、あなたは知識があたえられ、自分に満足ができなくなります」